

RETAILER ACADEMY NEWS

Nov 2018 | Bentley Motors Japan

コンチネンタルGTに使われている 世界から集めた最高品質の素材

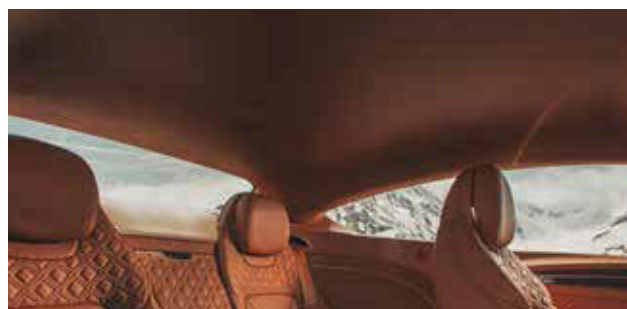


昨年発表された3代目のコンチネンタルGTには、最高品質の天然レザーから、希少さゆえに持続可能性に配慮して調達したウッドパネルまで、本物の中の本物の素材が使用されています。今回は、コンチネンタルGTのために世界中から厳選して集められた最高の素材をご紹介します。



イタリア製のアルカンターラ

コンチネンタルGTのインテリアに使用されているアルカンターラは、ファッションや家具などでも使用されている素材です。ベントレーでは、このアルカンターラをイタリアから直接調達し、ルーフライニングなどに用いています。室内で最初に目につくのはレザーシートやウッドパネルかもしれませんが、しかし、ルーフに使用するこのテキスタイルが、世界で最もラグジュアリーなグランドツアラーのお客様にとって、視覚的にも触覚的にも最高の体験を提供する素材なのです。



ドイツ製のレザー

インテリアに使用されるレザーは、ドイツのバイエルン地方で飼育された雄牛9頭分の革を使って製作されています。この最高品質のレザーで極上のキャビンを作り出すため、傷やシワなどを避けるように切り分けられたレザーピースは、総延長2.8kmにもおよぶ糸で縫い合わされます。厳格な基準に基づいて選ばれ、職人たちがプライドを持って作ったレザーは、コンチネンタルGTの快適さと洗練されたインテリアの実現に大きく貢献しています。



ハワイ産のウッドパネル「Koa」

ベントレーにはウッドパネル調達のエキスパートがおり、世界で最も優れたウッド素材を探すため、膨大な時間を費やしています。もちろん、自然環境の維持に配慮し、伐採した分だけ植樹する活動も続けています。こうしてエキスパートたちが見つけ出し、3代目のコンチネンタルGTで初めて採用されたウッドパネルが「Koa」です。エレガントな色合いと真っ直ぐな木目が美しいKoaは、ハワイでは古くからサーフボードやギターに使用されてきた素材です。



日本製のホイール

コンチネンタルGT用にオプション設定されている22インチ アロイホイールは、日本でフローフォーミング製法によって巧みに製造されたものです。日本の高い技術力により、軽量で複雑な3Dスポークデザインが実現しました。従来のホイール製造法ではなし得なかったデザインを可能にし、日本の職人が手作業で研磨し、完璧に仕上げられたホイールを使用しています。(フローフォーミングについては、Retailer Academy News No.35 [2015年3月15日号]のP8で解説しています)



スイス製の車載クロック

コンチネンタルGTの車載クロックには、ダイヤルにベントレーを象徴するモチーフの1つであるダイヤモンドパターンと、ウイングド「B」エンブレムを配しています。この時計は、世界最高峰の機械式時計を製造することで知られるスイスで造られています。なお、ベントレーと2003年にパートナーシップを締結し、このほどそのパートナーシップの延長が決定したブライトリングも、スイスの高級腕時計メーカーです。



競合ブランドが考える 未来のクルマ



白 動車を取り巻く環境が刻々と変化しているなか、世界のラグジュアリーカーブランドにもさまざまな変化が訪れようとしています。そこで今回は、競合ブランドの今後の方向性、そして登場が予定されているモデルなどを紹介します。

アストンマーティン

数ある競合ブランドのなかで、未来を見据えた大胆な計画を実行しているのがアストンマーティン。来るべき電気自動車の時代に向けて着々と準備を進めています。

そのひとつの取り組みが、英国ウェールズ州セント・アサンに建設中の新工場。同社にとって第2の主要生産拠点となるこの工場では、電気自動車の生産を行います。2019年に発表予定のSUVモデルを皮切りに、世界初のゼロエミッションの高級ブランドとなる「ラゴンダ」の生産も予定されています。

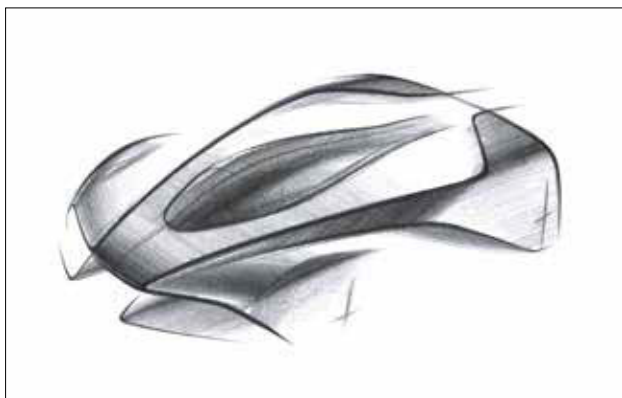


ゼロエミッションの高級ブランドとなる「ラゴンダ」SUVのティザースケッチ。2018年のジュネーブ・モーターショーで公開された「ラゴンダ・ビジョン・コンセプト」の市販モデルとなる。2021年に発表予定

2018年9月、アストンマーティンはプロジェクト“003”ハイパーカーの製作を発表しました。

同社はすでに初のハイパーカーとなるヴァルキリー（プロジェクト“001”）と、サーキット専用モデルのヴァルキリー AMR Pro（プロジェクト“002”）を開発中であるだけに、第3のハイパーカーの発表は驚異的なペースといえます。

プロジェクト“003”では、エアロダイナミクスに優れた軽量構造のボディ、ターボチャージャー付きでガスエレクトリック方式のハイブリッドエンジン、アクティブサスペンションシステムなどを装備。全世界500台限定で生産され、2021年後半からの納車開始予定と発表されました。



第3のハイパーカーとなる、“003”ハイパーカーのティザースケッチ

2018年11月には、同社初のSUVモデル「DBX」のプロトタイプが、テスト走行を開始したと発表しました。

今回の発表では、車名が正式に「DBX」に決定したこと、プロトタイプのテスト走行がウェールズのラリーコースで開始され、今後世界中でテストを行うこと、そして2019年の第4四半期に発表することを明らかにしました。



アストンマーティン初のSUVモデルとなる「DBX」のプロトタイプ。2015年に発表されたコンセプトモデルの2ドアクーペに対して、市販モデルでは4ドアボディとなる

フェラーリ

フェラーリは、2018年9月に行われた経営計画発表会において、前々から噂のあったSUVの開発を明言しました。

FUV (Ferrari Utility Vehicle) と呼ばれる同社初のSUVには、サラブレッドを意味する「Perosanguine」のプロジェクトネームが付けられました。フロントミッドシップ+トランスアクスル方式のDCTに、プラグインハイブリッド技術を搭載。同社のGTラインナップのひとつとなります。

2018年7月に亡くなった元フェラーリCEOのセルジオ・マルキオンネは、このニューモデルが世界最速のSUVとなることを示唆しました。ランボルギーニ・ウルスをはじめ、すでに強力なライバルが何台も登場している状況のため、相当なスペックが要求されることは必至。発表は2022年後半を予定しています。



これまで伝統的に4ドアモデルとSUVをつくらなかったフェラーリにとって、新開発のSUVは歴史的な変換点となる

ランボルギーニ

ランボルギーニは、2019年の初めにウラカンのフェイスリフトモデルを発表する予定です。

撮影されたウラカン・スパイダーのスパイフォトを見ると、フロントバンパーには、エアロダイナミクスを考慮した可変機構付きのエアインテークを採用していることが分かります。また、サイドのエアインテークが変更され、リアバンパーのディフューザー形状も一新。ペルフォルマンテと同様に高い位置に取り付けられ左右2本出しのエグゾーストシステムにより、最高出力は20-30ps程度向上すると見込まれます。



新型ウラカンはよりアグレッシブなエクステリアとなる

アウディ

アウディは、2018年9月にバッテリー電気自動車の「e-tron」を発表しました。

名実ともに新世代モデルとなるこのSUVモデルを皮切りに、同社は電動化攻勢を開始。2025年までに主要な市場において12種類の電気自動車を投入し、電動化モデルの販売台数を全体の約1/3にすることを発表しました。

スポーツカーラインアップの頂点に位置する「R8」も例外ではなく、後継モデルでは現行の5.2L V10エンジンを廃止。代わりに1000psを発揮する電動パワートレインに置き換える計画が噂されています。圧倒的なパワーにより、0-100km/h加速は約2.0秒と予想されています。



新型アウディ R8は、PHEVではなく電気自動車となる可能性が高い

メルセデス・ベンツ

新しいEVブランドとして「EQ」を立ち上げたダイムラーは、2018年9月にブランド初の市販車として「EQC」を発表。今後4年間で10種類のバッテリー電気自動車を発売する予定です。

「EQC」は2つの電気モーターを前後に搭載して4輪を駆動するSUVで、競合車はアウディ e-tron、テスラ・モデルX、ジャガー I-PACEなど。日本の急速充電規格「CHAdeMO（チャデモ）」にも対応し、2019年の発売を予定しています。



SUVボディをまとうて登場したバッテリー電気自動車の「EQC」

COMPETITORS INFORMATION



ニューモデル メルセデス・ベンツ S 400 d	
発表・発売日	2018年9月10日 予約注文開始
概要	<ul style="list-style-type: none">フェイスリフト後のSクラスでは初のディーゼルエンジンモデル新型3.0L 直列6気筒クリーンディーゼルエンジンを搭載4輪駆動、ロングホイールベースモデルも設定
車両価格 (税込)	S 400 d：11,160,000円 S 400 d 4MATIC：11,600,000円 S 400 d ロング：14,610,000円 S 400 d 4MATIC ロング：15,050,000円
デリバリー 開始時期	—



特別仕様車 BMW 740i Driver's Edition	
発表・発売日	2018年9月21日 発表
概要	<ul style="list-style-type: none">最量販モデルのBMW 740i M Sportをベースに、装備を厳選した特別仕様車Mストライプを施したブラックのダコタ・レザー・シートを専用装備特別専用色「シンガポール・グレー」を設定
車両価格 (税込)	BMW 740i Driver's Edition：12,320,000円
デリバリー 開始時期	—



特別仕様車 マセラティ レヴァンテ トロフェオ ローンチエディション	
発表・発売日	2018年9月26日 発売
概要	<ul style="list-style-type: none">2019年モデル導入に先駆けた日本限定15台のみの特別仕様車外装色は日本限定。車両生産過程を記録したビデオも提供3.8L V8 ツインターボエンジンは最高出力590ps、最大トルク734Nmを発揮。0-100km/h加速3.9秒、最高速度304km/h
車両価格 (税込)	マセラティ レヴァンテ トロフェオ ローンチエディション：23,700,000円
デリバリー 開始時期	—



ニューモデル ジャガー I-PACE	
発表・発売日	2018年9月26日 受注開始
概要	<ul style="list-style-type: none">ジャガー初のフルバッテリー電気自動車 (BEV)2基のジャガー製モーターにより、合計最高出力400ps、最大トルク696Nmを発揮。0-100km/h加速4.8秒AC 普通充電とDC 急速充電に対応。航続距離470km(WLTPモード)を実現
車両価格 (税込)	I-PACE S：9,590,000円 I-PACE SE：10,640,000円 I-PACE HSE：11,620,000円 I-PACE FIRST EDITION：13,120,000円
デリバリー 開始時期	—



一部改良 ジャガー XJ 2019年モデル	
発表・発売日	2018年9月21日 受注開始
概要	<ul style="list-style-type: none">「XJ」の50周年を記念した限定グレード「XJ50」と、20台限定の特別仕様車「XJ SPORT & LUXURY」を追加エンジンは、3.0L V6スーパーチャージド・エンジンと、5.0L V8スーパーチャージド・エンジン (575ps/510ps) の3種類を用意自動緊急ブレーキ (AEB) を標準装備
車両価格 (税込)	XJ PREMIUM LUXURY：12,530,000円 XJ PORTFOLIO：14,030,000円 XJ R-SPORT：14,340,000円 XJR575：18,870,000円 XJ AUTOBIOGRAPHY LONG WHEELBASE：20,690,000円 XJ50：13,210,000円 XJ SPORT & LUXURY：12,580,000円
デリバリー 開始時期	—



特別仕様車 キャデラック XT5 CROSSOVER URBAN BLACK SPECIAL	
発表・発売日	2018年10月11日 発売
概要	<ul style="list-style-type: none">キャデラック XT5 CROSSOVERの日本市場導入1周年を記念した特別仕様車最上級グレード「キャデラック XT5 CROSSOVER Platinum」をベースに、特別仕様の内外装カラーコンビネーションを採用アシストステップ、カラー LEDカーデシランプ、ドライブレコーダーを装備
車両価格 (税込)	キャデラック XT5 CROSSOVER URBAN BLACK SPECIAL：7,797,600円
デリバリー 開始時期	—

COLLABORATION



ブライトリング for ベントレー 誕生から15周年を記念する特別モデルも登場

ベントレー モーターズはこのほど、スイスの高級腕時計メーカーのブライトリングとの長年にわたるパートナーシップを更新したことを発表しました。

ベントレーとブライトリングのパートナーシップが始まったのは、今から15年前の2003年のこと。この提携により、ブライトリングはコンチネンタルGTの車載時計を製造する初めての腕時計メーカーとなりました。そして、当時パートナーシップの締結にセールス&マーケティング担当取締役として携ったのが、現在ベントレーの会長兼CEOを務めるエイドリアン・ホールマーク氏でした。

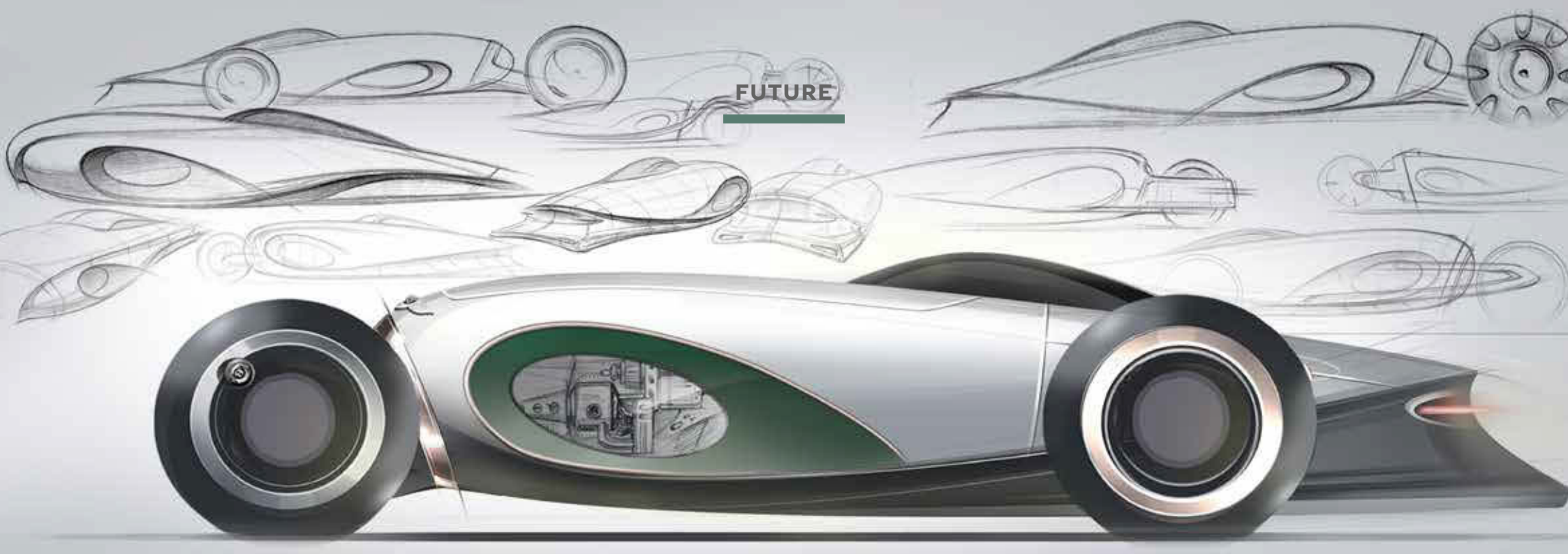
パートナーシップでは、ブライトリング for ベントレーだけでなく、ブライトリングのコア商品に特別なベントレー エディションが加わります。これを記念してリリースされたのが、「プレミエ B01 クロノグラフ 42 ベントレー プリティッシュレーシング グリーン」です。この時計には、ブライトリングのフラッグシップモデルである同社製キャリバー 01機械式ムーブメントを搭載。ムーブメントの動きが見える「BENTLEY」ロゴ入りトランスパレント・ケースバックは、このモデルだけの特徴です。ダイヤルはプリティッシュ レーシング グリーンで、ステンレス製プレスレットまたはプリティッシュ レーシング グリーンのレザーストラップからお選びいただけます。サブダイヤルは3時と9時の位置に、日付は6時の位置にそれぞれ配置されます。さらにこの時計には、「BENTLEY」と刻印されたプレートも取り付けられます。プレートのデザインは、1929年製の「プロワー」の大型ダッシュボードからインスピレーションを得たものとなっています。

2019年にベントレー モーターズは創業100周年を迎えますが、ブライトリングはそれに合わせて限定モデルを発表する予定です。



ホールマーク氏のコメント

ベントレーとブライトリングの長期にわたるコラボレーションは、2つのブランドが同じ方向に向かって進む際に、本物を目指して一緒に仕事をすると双方のパフォーマンスが向上することを実証する輝かしい例となりました。100周年が近づくにつれ、私たちは過去を祝福していますが、もっと重要なことは、私たちは革新への情熱を持って将来を見据えているということです。卓越した技術を持ち、専門家たちのクラフトマンシップ、先駆的な精神を共有できるブライトリングのようなパートナーがいることは、ベントレーが前に進むにあたって大きな自信となるものです。



ブリティッシュ ラグジュアリーの未来 RCAとコラボレーション

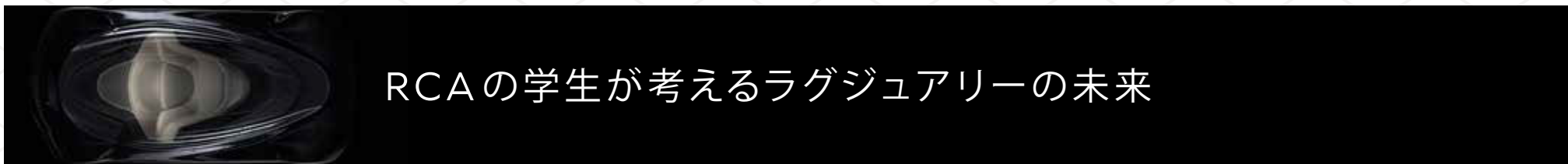
ベントレー モーターズはこのほど、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）とコラボレーションし、インテリジェント モビリティ プログラムのもとで学ぶ学生たちとともにブリティッシュ ラグジュアリー（※）の未来について構想しました。

学生たちは、ますます仮想的でデジタルになっていく世界において、物理的な実質性、技術、クラフトマンシップといった要素が、いかにしてラグジュアリーなグランドツーリング体験を生み出すために作られているかを想像するという挑戦を行いました。

RCAの自動車デザインプログラムの卒業生であり、ベントレーのデザイン部門責任者であるステファン・シーラフ氏は、「ベントレーは常にラグジュアリーカーの世界で先頭に立ってきましたが、このコラボレーションではミレニアル世代の学生たちがどんな未来を描いているかを聞きたいのです」とこのコラボレーションの意図を説明しています。シーラフ氏はまた、「世界各地から集まってきたデジタル・ネイティブ世代の視点が、さまざまなことを見て、新しく興味深い方向性で、ブリティッシュ ラグジュアリーを導く可能性のあるアイデアやコンセプトを求めました。今回参加した学生は、将来のクルマをデザインする人材ですから、非常にエキサイティングな挑戦となりました」などとも語っています。

RCAのインテリジェント モビリティでシニアチューターを務めるクリス・ソープ教授は、「進化する文化、破壊的なテクノロジーをどのように感情的な経験に変えるのか？ ベントレーから今後30年にわたる自動車のラグジュアリーを考えるように問われ、学生はこういったクエスチョンに取り組んでいます」などと語っています。

※ ベントレーとRCAのコラボレーションは、ラグジュアリー モビリティの未来をテーマに議論することを目的とした学問的なものです。ここで示されたデザインとモデルは、ベントレーの製品やコンセプトではなく、ベントレーの将来の方向性を示すものでもありません。



RCAの学生が考えるラグジュアリーの未来

「ラグジュアリー サウンドスケープ」



アイリーン・チュウさんは、ストレスの多い騒音を選択してフィルタリングし、快適なバイオアコースティック（振動や周波数により身体に影響を与えるもの）を残すことを可能にする車両を考案。ラグジュアリーカーの未来における音の役割を考慮しました。彼女は、サウンドスケープが自動運転の車内音響に対する変革的アプローチであり、それが乗員の健康や幸福、旅の経験にどのような影響を及ぼす可能性があるか実証しています。

「マテリアル ヒューマニティ」



ケイト・ナムグンさんが重視したのは、2050年にラグジュアリーカーの顧客によって高く評価されていると予想される感情や品質です。将来の真のラグジュアリーは、自動運転とEVが当たり前になっている世界において、内燃機関を備えたクルマを自分の手で運転することであると考えました。彼女は、現在の私たちが機械式腕時計に対してラグジュアリー感を抱くのと同じように、その頃には伝統的なエンジンが動く様子を見たい人は増えていると想像しています。

「ストラトスフェリック グランドツーリング」



ジャック・ワトソンさんは、今回のデザイン研究において100年近いベントレーの歴史から得たインスピレーションを取り入れました。彼が考えるラグジュアリーの世界は、持続可能でありながら成層圏を飛んで移動するグランドツーリング体験です。これが現実のものとなれば、国際的なビジネス旅行が人々の生活の場所を制限しなくなる、というシナリオを想像しています。

「エレガント オートノミー」



ユンジ・チェさんが重視しているのは、スマートシティのために造られたドライバーのいないクルマが走るエレガンスと英国のエチケットです。今回のプロジェクトでは、入り口および出口でのエチケットと、馬車から現代のクルマまで、時間の経過とともにどのように進化してきたのか、それが自動化する世界で進化し続ける方法に焦点を当てています。

受講必須のプログラムを 年内に必ず終了してください

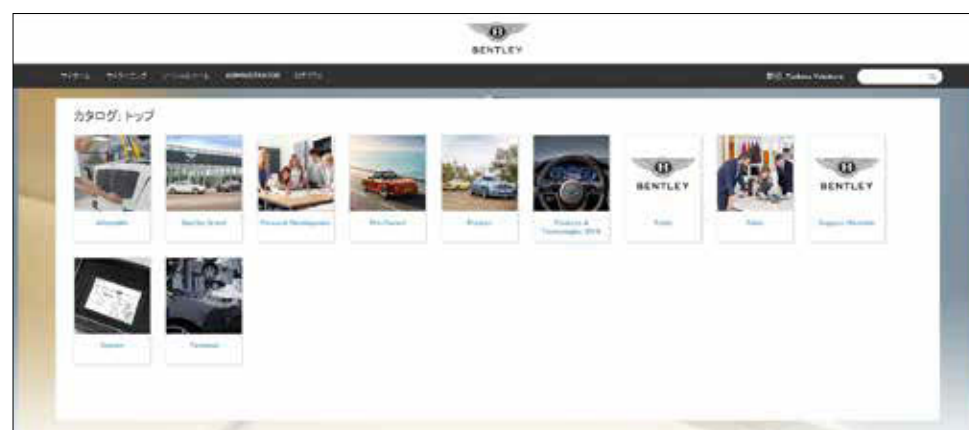
ベントレー モーターズでは、リテーラーの皆様に受講していただくeラーニングプログラムをご用意していますが、本年のeラーニングプログラムは全てのスタッフに受講いただけましたでしょうか？

下記の3つは、受講必須のプログラムです。年内に確実に受講を終了してください。年明け1月以降に、これらのプログラムに関するアセスメント（試験）が実施されます。アセスメントの詳細は、後日あらためてご案内差し上げます。

Continental GT 18MY part1
(already uploaded)

Continental GT 18MY part2
(already uploaded)

Bentayga V8 & 19MY
(already uploaded)



また、ハイブリッドモデル導入の一環として、来年以降は下記の2コースが準備されます。この2つは、セールススタッフおよびアフターセールススタッフに受講いただくことになります。

Bentayga Hybrid

Technology video E-learning

このほか、下記のコースも準備中です。

Audio system



APPEARANCE

セールスパーソンの身だしなみ ―シャツ編―

男性のビジネスシーンでは、相手に与える印象を左右するスーツは重要なアイテムです。そのスーツをさらに引き立てる大切な存在がシャツです。シャツにも種類がありますが、特に襟の形状はさまざま。襟は顔に近いだけに見られやすく、印象を大きく左右します。数多くの種類が並ぶシャツ売り場で悩んだことのある人も多いかもしれませんが、今回はビジネスで使えるシャツの襟型についてご紹介します。



レギュラーカラー



襟の長さや開きがスタンダードな定番中の定番。どんなジャケットやネクタイにも合う一般的な形状です。個性は出しにくいですが、誠実さや真面目さといった印象を与えることができるでしょう。TPOを問わずさまざまなシチュエーションで使えるため、手元に数着は持っておきたいシャツです。

水平カラー



襟羽の開きが180度前後で、前から見ると水平（水平）に近いという意味から名付けられました。太めのネクタイとの相性が抜群に良く、組み合わせ方のバリエーションは豊富です。ビジネスシーンで活躍するシャツですが、色柄によってはカジュアルに見せることも可能な、使い勝手の良い襟型です。

ワイドカラー



レギュラーカラーと並ぶスタンダードな存在がワイドカラーです。襟羽の開きが大きく、ネクタイとの相性が良いという特徴があります。また、襟がきれいに開いているため、首周りがはっきりして見えるという効果が期待できます。ブランドによって襟羽の開き具合が異なり、種類はかなりの多くなります。

ボタンダウンカラー



ノーネクタイやクールビズで活躍するのがボタンダウンカラーです。元は英国でポロの選手が着ていたものとされています。日本ではクールビズが浸透したことにより、人気を集めている襟型と言えます。レギュラーカラーやワイドカラーと比べると襟が高くなるので、フォーマルな場面での着用はNGです。

新世代のスタンダード LED ヘッドライトシステム

現在、高性能で先進的なヘッドライトシステムと言えば、LEDライトを使ったヘッドライトシステムです。
今回は、LEDライトの歴史や発光の仕組みから、先進的な運転支援ヘッドライトシステムの内容などを説明します。



約100年の歴史に改革をもたらすLED光源

自動車用ヘッドランプの歴史は、1890年ごろまでさかのぼることができます。これは1886年に世界初の自動車であるカール・ベンツの「パテント・モートルヴァーゲン」が走り出した、わずか数年後のこと。ただし、それはまだアセチレンランプでした。今に続く、電気式のヘッドライトの実用化は、それから約10年後となる1908～9年ごろです。そして第二次世界大戦後は、光源をライトと一体化したシールドビームが広く利用され、また、電球内にハロゲンを封入するハロゲンライトも普及します。とはいえ、これらはどれもフィラメントに通電して発光させる方式のものばかり。つまり、基本原理は100年近くも変わらなかったのです。そこに一石を投じたのが、1990年代に登場したディスチャージライトです。キセノンライト、HIDなどとも呼ばれ、蛍光灯と同じように放電で光を生み出します。しかし、期待の新方式のライトは、コスト高などの理由もあって、ハロゲンを駆逐するほどの普及は見せませんでした。しかし、2007年になってLEDヘッドライトがデビュー。LEDライト自体は1960年代に発明されていましたが、1993年の青色LEDの発明まで、白い光を実現することができなかったのです。LEDライトは2010年代後半になるとコストも下がり、急激にシェアをアップ。すっかり新世代のスタンダードを予感させる存在となりました。



長きにわたりヘッドライトの主力を担ったのがフィラメントを光らせる方式のライトでした。

先進の運転支援ライティングシステムの仕組み

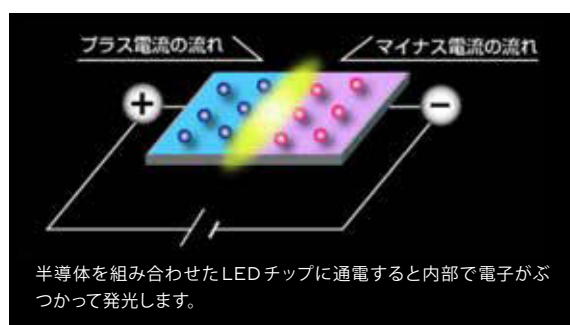
先進の運転支援システムには、LEDヘッドライトを使ったものが存在します。ベントレーでいえばコンチネンタルGTに採用されたマトリクスビームヘッドライトなどが該当します。対向車や歩行者を眩惑させることなく、広い範囲を明るく照射して、ドライバーの運転を補助するというものです。この機能の実現には、瞬時に点灯し、しかも数多く並べることができるLEDライトは必須の存在となります。クルマに搭載されたカメラによって、周囲を監視し、個々のLEDライトを点灯・消灯することにより機能を実現します。この機能があることで、ドライバーは、より広い夜間の視界を得ることができます。



対向車や先行車、歩行者への眩惑を防ぎながら広い範囲を照らすことを可能とします。

半導体であるチップが発光するのがLEDライト

LEDライトは、半導体を組み合わせたLEDチップ自体が発光します。LEDチップに電流を流すと、内部で電流のプラスとマイナスの流れがぶつかって光が発生します。LEDチップが小さいため、光源を小さくすることが可能です。そのためにライトのデザインの自由度が高まりました。LEDの消費電力は白熱電球の4分の1から5分の1といわれるため省エネになり、熱もほとんど発生しません。さらにLEDチップ自体は約4万時間もの寿命があると言われています。照明システム全体で言えば、そこまでの長寿命は実現不可能ですが、それでもフィラメントで発光させる方式の光源よりも、はるかに長い寿命を実現できます。そして瞬時に点灯できるというのも特徴のひとつ。これにより、数多くのLED光源を巧みに制御することで、先進の運転支援を実現します。



半導体を組み合わせたLEDチップに通電すると内部で電子がぶつかって発光します。

競合モデルのマトリクスLEDヘッドライトの有無

先進の運転支援システムであるマトリクスビームヘッドライトを搭載するコンチネンタルGT。競合モデルでは、マトリクスヘッドライトを装備するモデルと装備のないモデルが分かれています。

■ 競合モデルのマトリクスLEDヘッドライト装備の有無

ブランド・モデル	装備の有無	装備名
メルセデス・ベンツ Sクラス	○	マルチビームLEDヘッドライト
BMW 7シリーズ	○	BMWレーザー・ライト
アウディ A8	○	HDマトリクスLEDヘッドライト
マセラティ クアトロポルテ	×	—
アストン・マーティン DB11	×	—
ボルシェ 911	○	ボルシェ・ダイナミック・ライトシステムプラス
ランドローバー レンジローバー	○	ピクセルレーザー LEDヘッドライト
ロールス・ロイス ファントム	○	レーザー・ヘッドライト・システム

LEDライトのメリット

- ・ 小型軽量でデザイン性に優れる
- ・ 長寿命
- ・ 高効率で省エネになる
- ・ 先進運転支援に利用できる

LEDライトのデメリット

- ・ 従来のモノよりもコスト高になる
- ・ 熱を発生しないのでライト周りの雪を溶かせない